

中国の「マニ教」に関する一考察：福建省霞浦県の事例から

兼 城 糸 絵

1、はじめに

マニ教とは、3 世紀にメソポタミアに生まれたマーニー・ハイイエーという人物によって創始された宗教である。その成立背景にはゾロアスター教やグノーシス思想、キリスト教等の影響がみられ、善と悪、光と闇、精神と物質といった二元論的世界観をもつことが特徴である。最終的には人間の魂を肉体から解放し光の世界へと導くことを目的としており、汚れた肉体を浄化すべく不殺生や性交の禁止、肉食の否定などといった禁欲主義的な要素もみられる。メソポタミアから発祥したマニ教は、一時はヨーロッパにも伝わり、中央アジアを経由して中国南部にも到達したとされている（注1）。

青木（2011）によれば、7 世紀頃に中国に到達したマニ教は二つの方向に沿って勢力を拡大したという。その一つが「西域マニ教」であり、8 世紀から10世紀にかけてウイグル王国の国教として採用されたが、その後ウイグル王国が仏教化することによって滅んだとされている（青木 2011:86）。そして、もう一つが「江南マニ教」であり、843年の会昌の禁圧の際に華北から江南地方に逃れたものを指す（青木 2011:86）。この「江南マニ教」の伝来ルートについては不明な点が多いとしながらも、土着の道教や仏教などの民間信仰に吸収され、やがて「明教」という宗派を形成するようになったという（青木 2011:86）。北宋の方臘の乱（1120年～1122年）頃には「明教」と称される宗教結社が反乱軍に含まれていたという記録が多数確認され、その特徴から「喫菜事魔」などと呼ばれていたという（常塚 2000：99）（注2）。

ここで「マニ教」や「明教」の特徴について簡単にまとめてみたい。先述したように、マニ教では「汚れた肉体」から本質を解放するために、不殺生を尊び、肉食や飲酒、性交を慎むなどの禁欲を説いた。マニ教の教義的には食べてよいものの代表例は果物であり、特にキュウリやメロンはもっともよいものとされた。こうした生活上のタブーに加え、マニ教徒は白い服を身につけ、一日一食の菜食や日に4～7回の祈祷を捧げ、週に一度の断食も行っていた（山本 2011:38）。そして、春分の頃には、マーニーの死を記念して行われるマニ教最大の祭り・ベーマ大祭が行われる。青木によれば、「ベーマ」とはギリシア語で「椅子」を意味し、大祭期間中には空席となった椅子に教祖の御真影をかかげ、聖職者たちが位階順に連なって儀式の中心とすることからの命名であるという（青木 2010:176）。マーニーはこの祭りの際に降臨するとされ、このシーンを描いたミニアチュールには中央に椅子がおかれ、そこに果物を捧げる聖職者の姿が描かれている（青木 2010:177）。ベーマ大祭に関する資料は限られているため詳細を明らかにすることは困難であるが、元マニ教徒で後にキリスト教に改宗したアウグスティヌスがベーマ大祭を「徹夜の行」と述べていることから、マーニーを讃える讃歌の朗読等が幾晩かに渡って実行されていたようであるとしている（青木 2010：179）。

後に中国に流入したマニ教も、上述の特徴と類似した特徴をもつものとして描かれており、「明教」と記されてきた。史料類に現れたマニ教認識を検討した常塚によれば、当初主にウイグルにおいて認可された宗教として描かれていたものが、会昌の廃仏以降は社会的・宗教的秩序を乱すものとして記述されていたという（常塚 2000:98）。その後、宋代頃の史料（『宋会要輯稿』・『鶏肋編』）には「明教」と名乗る人々が愚かな民を煽動していることが記述されている他、宗教結社として反乱に関わっていたという記述もみられることから、やはり反社会的存在として認識されていたことがわかる（常塚 2000:98-99）。また、史料に現れた「明教」に関する記述からは、福建や温州一帯で広く信仰されているという特徴を挙げることができる他、肉や酒を断ち、「夜聚晝散」するなどという具合にある程度「マニ教」と類似するような宗教生活を送っていたことが伺える。史料に現れた記述のみを根拠に当時の実態について述べることは難しいが、少なくとも「明教」が時の権力にとって好ましくないもの、すなわち「邪教」として認識されていたことがわかる。こうして「邪教」として禁止された「明教」は、その後記録にもみられなくなったようであり、現在ではその知識も失われたとされていた。

ところが、2009年、中国福建省霞浦県のある山村にて「マニ教」に関連する遺物が発見されたというニュースが報じられた。上万村という名のその村は、中国国内のメディアから「数百年もの間“マニ教”を守り続けた村」として注目を集め、そこで発見された遺跡や文物を紹介するドキュメンタリー番組も制作された（注3）。同時に、中国の研究者が複数回にわたって現地調査を行い、「マニ教」に関連した史跡や文献の存在を確認し、これを収集するに至った。中でも、中国社会科学院の陳進国は、現地調査の成果をいち早く発表し（陳 2010）、日本でもその成果について報告している。陳は、特に「明教」に改宗したという人物に関する検討や収集した族譜や儀礼書等の文献上にみられる「マニ教」的要素についても触れた上で、道教や仏教などと混ざり合ってローカル化していった可能性について幅広く議論している（陳 2010）。

陳が日本で行った報告内容については、青木（2011）によって要点がまとめられているが（注4）、その中で課題として提起されたのが、実際に現地で「マニ教」の教義に基づいた儀礼が実践されているのか否かという点であった（青木 2011:90）。陳による報告や論文では、上万村で発見された遺跡や文献資料に「西域マニ教」との共通性が見いだせることから、上万村の宗教活動自体も「マニ教」と関係しているかのように述べられている。確かに、上万村で発見された文物や文献には「マニ教」との関連性が見いだされたのかもしれないが、過去にそのような痕跡があったとはいえ、現在村で生活する人々の宗教実践が数世紀前に滅んだとされる「マニ教」的教義に基づいたものであるかどうかは検討を要する。

こうした課題に迫る試みのひとつとして、本稿では、上万村で毎年旧暦2月に行われている祭祀について報告することを目的とする。この祭祀は、旧暦2月15日から数日かけて行われる上万村で最も重要な祭りであり、明教に改宗した祖先に関連していることから研究者の注目を集めている。しかしながら、上万村自体が辺鄙な場所にありアクセスしづらいせいも、実際に上万村で行われている儀礼を観察したという報告は少ない。長年上万村で調査を行っているという林子周らが上万村やその周辺村落で行われている祭祀について報告しているが（林・陳 2010）、それも祭祀の日程

など大まかな概要を述べるに留まっている。筆者はこれまで2度に渡って現地調査を行ってきたが、いずれも滞在時間は短く、インタビューや参与観察で得られたデータもごく限られたものになっている。資料的な限界はあるものの、本稿では適宜先行研究を参照しながら上万村で行われている祭祀について述べ、マニ教との関連性について簡単な考察を行ってみたい（注5）。

2、調査地概況

（1）上万村について

「発見」されたマニ教徒村落は、福建省寧徳市霞浦県柏洋郷上万村という小さな村である（写真1）。霞浦県は福建省の北東部に位置し、海と山に囲まれた県でもある。福建省の省庁所在地である福州市から約240km離れているが、現在は高速鉄道を利用するならば、福州（あるいは福州南）駅から一時間程度で到着できる。また、霞浦県は海に面していることから、海産物の宝庫として知られているが、一方で標高1,000級の山地が海に迫るようにそびえていることも特徴である。特に、山地には少数民族である畬族の民族郷があることでも知られている。上万村が属する柏洋郷は畬族の民族郷をさらに越えた山中にある。

上万村は、柏洋郷の行政機関が置かれた柏洋村から車で30分ほど離れた場所に位置しており、郷の中でも端の方に位置する。村を經由する公共交通機関はなく、ふもとの市街地から向かおうとするならば、タクシー等をチャーターし、1時間半近くも細い山道を登っていかなければならない。これは筆者のような来訪者に限らず村出身者も同様であり、自家用車をもたない者は数人で小さな車をチャーターして市街地と村を行き来している。



写真1：上万村（2013年8月撮影）

筆者の聞き取り調査によると、上万村の人口は現在約700人であり、林姓が大多数を占めている。住民はほぼ漢族であり、地元の方言である霞浦方言を話す他、中国の標準語である「普通語」も通用する。村の主要な生業は農業で、村を取り囲む山地を利用して小規模の棚田を作って稲作をする他、野菜類の露地栽培も行っている。ただし、農業だけで生活を立てることは難しく、ほとんどの男性が霞浦県の市街地や福州、あるいは温州（浙江省）や上海で出稼ぎをしていることが多い。現

在は、子弟の教育や高齢者の福祉を理由に、霞浦県の県域に移り住む者が多い。そのため、基本的に村に残っている者は老人世帯が中心となっている。

上万村に入るとすぐに目につくのが、プロテスタントの教会である。『霞浦県誌』によれば、霞浦県では同治5（1866）年にイギリスの聖公会から派遣されたイギリス人宣教師と中国人宣教師によって布教が開始され、同治10（1876）年には上万村から15kmほど離れた横江村一帯にて布教活動を行ったという（注6）。上万村の教会がいつ頃建設されたのかは明らかでないが、1949年の時点で存在が確認されているため（注7）、少なくともそれよりも前に建てられていたことは明らかであろう。現在、31世帯が信徒として活動している。

また、上万村には、観音を祀った観音堂や地方神である泗洲佛を祀った小さな祠等がみられ、毎月旧暦1日と15日になると、女性を中心に多くの参拝者が訪れている。このような活動をとってみても、筆者が調査しているような福建省の他の農村と何ら変わらない状況がみられるが、中でも林氏の人々が重要視している宗教施設である「林氏宗祠」（写真2）では、一年に一度盛大な祭祀が行われている。



写真2：林氏宗祠（2013年8月撮影）

一般的に、宗祠とは父系出自集団である宗族が祖先の位牌を安置するために建てる建物を指す。そこでは年に数回男性成員を中心としたメンバーで祖先祭祀が行われ、一族統合のシンボルともなっていることも多い。ところが、上万村の「林氏宗祠」の場合、祖先の位牌が置かれるべき場所には位牌がなく、林瞪という人物とその妻、そして温將軍と康將軍という「神」が祀られている。基本的に「宗祠」と名乗る施設が祖先を祀るための施設であることを踏まえると、この場所はむしろ神明を祀る施設である「廟」に近い性質をもっている。ただし、上万村の人々はここを「祖廟」と呼んでおり、あくまで祖先を祀る施設として認識しているようであった。そして、一年に一度、旧暦2月に林瞪という人物に対する祭祀を実施しているのである。その祭祀の概要について確認する前に、まず上万村の住民の大部分を占める林氏一族の来歴について確認し、その上で林瞪という人物について述べていきたい。

(2) 上万村の林氏について

ここで林氏一族の歴史について、簡単に紹介したい。閲覧できた族譜（注8）によると、上万村の林氏は、開基祖である林咍という人物が元和10（815）年に福州の南に位置する莆田市閩下から移住してきた所から始まる。上万村の林氏は世代を重ねるにつれて村の外へと子孫が移住し、現在では上万村の隣にある塔後村、柏洋村、そして浙江省の蒼南や天台へ移住した支派の存在が確認されている。そのことから、上万林氏の子孫たちは、福建省の北東部に位置する霞浦県を中心にしながらも、浙江省南部にまで広がっていることがわかる。

さて、前掲の陳進国や林子周による報告の中でも注目されてきたのが、「明教」に改宗したという祖先の存在である。それが、上述の林瞪という人物である。筆者らが閲覧した族譜によれば（注9）、林瞪は開基祖から数えて8世にあたり、林伍公（林五公）とも呼ばれている。彼は、咸平6（1003）年2月13日に生まれ、後に陳姓の女性と結婚し、2人の娘をもうけた。そして、天聖5（1027）年、林瞪が25歳になった時に世俗を捨てて「明教」へ改宗し、その後嘉祐4（1059）年3月3日に亡くなっている。伝承によれば、死後、林瞪は福州を火災から救ったという功績が讃えられ、神としての称号を与えられている（注10）。

以上、簡単に族譜の記述を紹介したが、その記述を踏まえると、宗祠に祀られている林瞪は直系の子孫を残すことはなかったようだが、上万村の人々からは祖先として認識されていることがわかる。一方で、死後福州を火事から救ったという功績で神として報ぜられているという記述からは、林瞪には「神」としての性格も付与されていることが伺えた。

そこで、現在上万村で行われている年中行事のうち、旧暦2月15日に行われている林瞪、すなわち「林伍公（林五公）」の祭祀に注目したい。林らの報告で「明教の林瞪」と形容される人物に対して、どのような祭祀が行われているのか。以下、筆者らが2014年3月に観察した「林伍公」の生誕祭の一部始終について述べていく。

3、旧暦2月の祭祀―「林伍公」の生誕祭

筆者らは、2014年3月14日（旧暦2月14日）13時頃に上万村に到着した。その日は祭りが始める前日ということもあって、多数の男性が宗祠に飾りつけや供物の準備に奔走していた（写真3）。

林氏宗祠の内部には、「神牌」および神像が祀られている。それが開基祖から数えて8代目にあたる林瞪公とその妻である。「勅封 洞天興福○使真君」（○は文字が不鮮明）と記された「神牌」は厨子に納められて中央に安置されており、向かって左側には陳夫人の神像と温元師の神像が置かれ、右側には林瞪公の神像と康元師の神像が置かれている（写真4）。



写真3：飾り付けが終わった林氏宗祠（奥の建物）
左側のドーム状のテントは宴会場（2014年3月撮影）



写真4：林瞪（右）と陳夫人（左）。
2人の間には「神牌」が置かれている（2014年3月撮影）

村民によれば、もともと林瞪は村から徒歩15分ほど離れたところにあった楽山堂と呼ばれる施設で祀られていたが、そこが使えなくなった（倒壊した？）ため林氏宗祠内部で祀られるようになったという（注11）。ある老人によれば、楽山堂があった頃には、祭祀の日になるとそこから林瞪公を宗祠に移動させてきたという。林氏宗祠自体はもともと祖先の位牌を安置していたようだが、文化大革命の際に位牌を置けなくなったため、現在は各家庭で祖先を祀っているという。

さて、林瞪に対する祭祀について報告した林子周と陳劍秋は、上万村のみならず関連する2つの村落の祭祀についても述べている（林・陳 2010）。林によれば、柏洋郷に属する柏洋村（注12）と塔後村では、上万村とほぼ同じ時期に林瞪に関する祭祀が行われるという（林・陳 2010）。このうち、塔後村は、上万村から徒歩20～30分ほどの位置にあり、上万林氏の支派が住んでいる。今回観察した祭祀では、数人の塔後村住民（主に男性）が手伝いとしてやってきていたことから、互いに協力関係にあることが伺われた。上記の3つの村で行われる儀礼については林らが一連の過程を表にして示しているが（林・陳 2010:83）、ここではそのうち上万村と塔後村の部分を示す（表1）。

表 1：上万村と塔後村で行われる祭祀のプロセス（林 2010:83を筆者が翻訳、一部省略）

場所	日時(旧暦)	活 動 内 容
上 万 村	2月12日夜	①「重生儀式」を行い、林燈の誕生日を祝う。 ②線香をあげ、願掛けや願解きをする。
	2月15日	①線香をあげ、願掛けや願解きをする者が数倍に増えていく。 ②夜になると劇団がやってきて、劇の奉納を始める。
	2月16日	①早朝と午前中も引き続き線香をあげ、願掛けや願解きなどが行われる。 ②午後から夜にかけて劇が奉納される。
	2月17日	①午前中は引き続き線香を焚き、願掛けや願解きが行われる。 ②午後から夜にかけて、劇の奉納が行われる。 ③夜の劇が終わったら「跳神」を行い、一年の収穫を問う。
	2月18日	通常、願解き等は行わない。入口のドアを開き、塔後村から来た迎神の隊列を迎え入れる。そして、祭請儀礼を行い、神像を塔後村へと運ぶ。
塔 後 村	2月18日	①午前7時半に、神を迎えるための「鑾駕」を担ぎ、ドラや太鼓が鳴り響く中、迎神活動を行う。塔後村の林氏宗祠から出発し、上万村の林氏宗祠に到着すると、祭請儀礼を行い、神像を載せて戻る。ただし、迎神隊列は、必ず観音亭と廊橋を通らなければならない。 ②神像を安置した後、すぐに線香をあげる。そして、願掛けや願解きなどを行う。 ③午後には劇団が到着し、夜から劇が上演される。
	2月19日	①早朝から午前中にかけて、引き続き線香をあげ、願掛けや願解きなどが行われる。 ②午後と夜はそれぞれ劇が奉納される。
	2月20日	①早朝と午前中も引き続き線香をあげ、願掛けや願解きなどが行われる。 ②午後から夜にかけて劇が奉納される。 ③夜の劇奉納が終わり、劇団が退出すると、「跳神」が行われる。一年の収穫について尋ねるが、時間があれば他のことも聞く。
	2月21日	①午前8時に神を送る儀礼が行われる。神像は塔後村の林氏宗祠を出発し、再び上万の林氏宗祠に運ばれる。 ②法師を呼び、上万の林氏宗祠にて再度儀礼を行い、すべての日程が終了する。

表1によれば、上万村での祭祀はまず12日の夜に行われる「重生儀式」なるものからスタートする。族譜に記されているように、林燈公が誕生した日は旧暦2月13日とされているが、表1に示した林らの報告によれば、誕生した日に直接関連する儀礼は前日の夜中に行われていることになる。筆者が上万村で行った調査によると、確かに12日の夜に儀礼らしきものを行っているが、それは林燈公の神像の衣服を新しくするだけだと説明された。その際には線香をあげるが、特に宗教的職能者による儀礼は行わないという。今回の調査では12日の夜に行われた活動を観察していないため、林子周が述べるような「重生儀式」がどのようなものかは不明なままである。ただし、儀礼は深夜（午後11頃～12時頃といわれている）に行うことになっているようであった。こうした深夜に行われる儀礼の存在については、「明教」との関連性が指摘されている（注13）。

旧暦2月12日の深夜に林燈の服を新調し誕生日を祝うと、それから上万村では特に何もせず、旧暦2月15日から始まる祭祀や宴会の準備を行う。筆者らが3月14日の昼頃に訪れた際には、この日

のために雇われたプロの劇団員たちが宗祠の内部に設置された舞台で劇の上演に向けて着々と準備を進めていた。一方、宗祠の外では宴会にむけて大きなドーム型のテントが用意され、その傍らの民家には調理場が設置された。こうした準備作業は基本的に、「福頭」として選出された8人の男性を中心に林氏の男性成員によってすすめられる。

大体の準備が終わったところでメンバーはそれぞれ家へ帰っていったが、筆者らがお世話になった「福頭」の家では、女性を中心に翌日使用する供物の準備がすすめられていた。その家で準備されていた供物は、表のとおりである（表2）。

表2：ある家庭で用意された供物一覧

1	鶏（一匹）と鶏の血を固めたもの
2	豚の顔の皮とその他の部位（顔が上に来るように重ねておく）
3	豚の肝臓
4	三枚肉（豚）
5	イカ（2杯）
6	豆腐（大きめのものを3丁）
7	白キクラゲ（軽くゆでる）
8	椎茸（軽くゆでる）
9	「年糕」（モチ）（円柱形×5個、三角錐×5個、小さな団子×2個）
10	魚一匹（種類不明・事前に蒸す）
11	米酒と茶（プラスチック製の赤い杯に入れる）
12	果物（りんごやみかんなど）

注）表中2と3の供物で豚を丸一頭捧げたことになると思われる。

表2であげたような供物は大体どの家でも共通している上に、どれも調理をせずに蒸したり茹でたりするだけであった。そして、それぞれ赤い皿の上にのせられた他、りんごやみかんといった果物は大きめの皿などに盛りつけられた。果物は何でも良いらしく、中にはドラゴンフルーツやグアバを供物としている場合もみられた。

さて、旧暦2月15日の朝を迎えると、早朝から宴会用の食事を準備する人々が集まり、下ごしらえが始まる。こうした調理もすべて村の人々で分担しているらしく、リーダー役らしき男性を中心に女性が4～5人集まって作業をしていた。宗祠の前には前日にセッティングを住ませた巨大なテントがあり、テントには10人近くがすわれる円卓が36個並べられた。そして、「熱烈祝福林五祖公誕辰慶典」と書かれた赤い横断幕が貼られた。こうした赤い横断幕は村の入り口にも掲げられ、遠方から帰ってきた親類縁者を歓迎する文言が書かれていた。こうした所からも、旧暦2月15日の祭

祀が祖先に関連するものだと認識されていることがわかる。

7時を過ぎると、徐々に参拝者が集まり始める。祭壇の前に用意された大きなテーブルには、村内の家々から運び込まれた供物が並べられていく。林子周の報告によれば、神に対する御礼として捧げる供物には肉や魚類、そして五種類の簡単な菜食類（「黄花菜」や昆布、椎茸、豆腐、筍など）があるという（林・陳 2010:85）。そのうち、「肉類は林瞪の部下に与えるものであり、菜食類は林瞪とその妻に捧げられるもの」（林・陳 2010:85）とされている。実際に供物を並べる際には、基本的にそれぞれの家ごとに並べていたが（写真5）、供物のうち果物類のみが祭壇に近い方に並べられていた（写真6）。供物を並べ終わると、人々は林瞪らに対して線香を捧げる他、宗祠の外に用意された香炉にも同様に線香を立てていく。それが終わると、外に用意された炉で紙銭を燃やし、爆竹を鳴らす。



写真5 供物



写真6 祭壇に近い方には果物類が並べられ、
後方には肉類を含む供物が並べられる。

その後、8時半頃には儀礼の執行役となる男性・老林（70代）が現れた（注14）。老林は持っていた鞆から赤い服と黒い帽子を取り出して身に纏い、儀礼に使う道具をセッティングすると、神を呼び出す経文を唱え始めた。いくつかの経文を唱えた後、村民の個人的な願い事を叶えてくれるよう神に依頼する。その際には、経文が印刷された紙に依頼者の氏名等を書き込み、持っていた印鑑を

押し、それを読みあげる。一通り読み上げると、直径10cm程度の小さな銅鑼を2枚合わせた道具を用いて、依頼者の願い事に対する神の意見を尋ねる（注15）。その道具には長い紐がついており、この紐を引っ張りながら2枚の銅鑼を鳴らすように動かし、地面に落ちた際に出た面の組み合わせから神の意志を読み取っていた。なお、経文を読み上げる際にはほぼ現地の方言で読み上げていたようだが、内容に関する詳細な分析については稿を改めたい。

さて、こうした儀礼をいくつか行った後に、「跳神」（降神儀礼）が行われた。表1によれば、最終日に行われるとされていたが、祭祀の期間中は毎日行っているようであった。

「跳神」は、以下のように行われた。まず神の憑坐となる男性が祭壇を背に線香をもったまま立つ。傍らで老林が経文を読み上げる中、別の男性が棒のようなもので机を叩いて「トントントントン…」と音を出し続けていると、憑坐となった男性がトランス状態に入り、突然奇声を上げて走り出した。そして、机の上に飛び乗ったかと思うと、体を小刻みに揺らし続けた。この状態になると、神が降臨したとされている。降臨した神は林瞪だといい、女性を中心としたクライアントたちの悩みに次々と答えていった。

これらが終わる頃になると、宗祠の外では宴会が始まる。この宴会は2年前から始められたものであり、「福頭」と霞浦の街に暮らす2人の実業家が協力して行われた。宴会は400人近くが参加し、遠くは浙江省からも客人が招かれていた。料理はすべて村の人々によって作られたが、魚や肉類の他、筍など山地の食物もふんだんに使用された豪勢なものであった。その他、各テーブルには「白酒」やビールが置かれ、皆賑やかに杯を交わしていた。

宴会が終了する頃になると、再び赤い服を身にまとった老林が林瞪に対して祈りを捧げる。その際に用意される供物は、宗祠内にある専用の台所で作られており、野菜類や肉類、果物類が並べられた。願掛けの際に唱えていた経文とは別の経文を読み上げ、その日は終了した。儀礼が終了した後、舞台では劇（閩劇）の奉納が行われた。

表2に示したとおり、こうした儀礼や劇の奉納が旧暦2月17日まで続けられるが、18日には塔後村の人々が林瞪を迎えにやってくる。その時は神像を中心に隊列を組み、ドラや鐘を打ち鳴らしてやってくるため非常に賑やかになるようで、上万村の村民とともに塔後村へ行くのだという。そして、塔後村でも同様に儀礼を行った後、神が再び上万村に戻ってくると一連の過程が終了することになる。筆者が調査を行った福建省福州市近郊の農村では、旧暦1月15日等に一年の平安を祈念して神を輿にのせて集落中を巡行する姿がみられる（これを「遊神」と呼ぶ）。上述のような隊列も「遊神」のひとつだと考えられるが、上万村では旧暦1月15日ではなく、旧暦2月15日のみこうした活動を行っているのだという。

4. おわりに一考察にかえて

上述の事例について考察する前に、漢族の宗教観について簡単に述べてみたい。これまでの研究からは、漢族の宗教がもつ特徴のひとつとして、儒教や道教、仏教等様々な宗教や世界観が混在し重層的に存在していることが指摘されてきた。渡邊が「民俗宗教」と表現したように（渡邊

1991:3)、超自然的存在に対する信仰が人々の日常生活の中の招福除災などといった感覚と不可分に存在していることもその特徴であろう。また、そうした宗教的世界観は主に神明 (god)・鬼魂 (ghost)・祖先 (ancestor) という存在を中心に構成されており、人々の日常生活ではそれぞれに対する祭祀が毎日のように行われている。これらの3者に対する祭祀の仕方は多少異なっているが、それらを大まかに整理するならば、以下ようになる (注16)。

まず、神明は人間に対して福をもたらし存在であるが、人間の側が求めなければ何も与えない。平穏無事に日常を過ごすためにも、突発的な災禍から身を守ることは必須であり、そのために日常生活の様々な機会を通じて神々に対する祈祷を行う。特にそうした災禍をもたらし存在として鬼魂の存在が想定されており、定期的に厄除のための儀礼を実施することが必要となる。一方で、祖先も神明と同様に人間に対して福を与える存在であると認識されているが、それは子孫が正しく祖先を祀り、供養することによって成立する関係でもある。もし子孫が正しく祖先を祀らない場合は、それがたちまち子孫にとっても危害を及ぼしかねない存在となる。そうした目的で祀られた様々な神や祖先に対する祭祀の日は、人々にとって招福除災を願う重要な機会となる。神明に対しては主に誕生日が主要な祭祀機会となるが、祖先の場合は春節や清明といった機会に行われる。そこでは、宗教的職能者による儀礼が行われる他、供物を捧げ、参加者が共食する様子がみられる。もちろん、地域によっては祭祀の内容に差異がみられるが、大体の構造としては共通したものがみられるとあって良いだろう。

以上を踏まえると、今回の調査で観察しえた上万村の祭祀は、漢族の農村等で一般的に行われているような神祇祭祀や祖先祭祀の性格をミックスしたようなものであると考えた方が妥当である。事例でも述べてきたように、儀礼の実施主体である上万村の人々は、旧暦2月の祭りを祖先祭祀の機会だと考えており、祭祀の対象たる「祖先」を「神」ともみなし、人々の生活に平安を与えてくれる存在であると認識していた。例えば、先述したような「マニ教」や「明教」の特徴には、白服の着用や菜食、断酒などといった戒律や夜通し行われるという救世主の降臨を待つ儀礼の存在が挙げられるが、少なくとも今回観察した人々の宗教実践にはそういった要素がみられなかった。その上、儀礼において人々を汚れた肉体から解放し、光の世界へと導く「神」の姿が想定されているとも思えない。そういったことから、上万村で行われている祭祀は「マニ教」や「明教」の伝統を純粹に守り通したものとは言い難いことは明らかであろう。本稿で報告した事例は、偶然にもベーマ大祭と開催時期を同じくするものの、「祖先」でもあり「神」でもある存在に対して、一年の平安や除災を願って行われている祭祀として捉えた方がより実態に近いだろう。

ただし、そうであるからといって一概に「マニ教」や「明教」的要素を否定することもできないかもしれない。例えば、林論文にも述べられていたように、菜食していた祖先に対する供物には果物を中心とした菜食を捧げ、部下である神々に肉類を捧げるといった行為は、やはり祖先が「明教」に改宗し、菜食をしていた者だということに由来する行為だとも解釈できる。今回の調査で得られた事例の場合、基本的に肉類の供物はそれぞれの家ごとにまとめて配置されたが、果物類は果物類だけでまとめて祭壇に近いテーブルに置かれた。他の漢族の村落でも、宗教的行事が実施される場

合には参加者が菜食することもあるため、菜食自体は珍しいことではないが、祭祀対象となる神明のみが菜食すると考えられている点は興味深い。こうしたわずかながらに見られる特徴がどこまで「マニ教」あるいは「明教」らしさを代表するのかは、今後の資料との比較を待たねばならないだろう。

以上、簡単ではあるが、福建省で「発見」された「マニ教村落」の祭祀について事例報告を行ってきた。今回は上万村のみに注目したが、陳や林による報告の中には、周辺村落でも類似の祭祀が行われている様子がみられた。上万村と周辺村落で行われている祭祀の詳細や上万村の祭祀で使用された経文に関する分析については、今後の課題としたい。

注

1. 以上、村上（2006）を参照。
2. 方臘の乱と「喫菜事魔」、マニ教の関係については笠沙（1947）を参照。
3. 例えば、福建電視台によって制作された「《惊天石像》記霞浦上万村摩尼教惊世发现」が挙げられる（2009年11月放送・15分番組）
4. 青木によるシンポジウムの報告では、上万村で発見された遺跡や収集した文献がリスト化されているが、陳論文を読む限りでは、そのうち『孫綿大師来歴』が記載された『孫氏族譜』に関しては上万村ではなく、柏洋郷禪洋村で発見されたものとされている（陳 2010:349）。また、同様にリストに挙げられた『科儀書』などの文献資料の提供者である“陳法師”や“謝法師”という人物については、「柏洋郷の瑜伽教の法師である」（p.351）とあるのみで、上万村の人物であるかどうかは不明である。そのため、これらの資料については上万村の人物が関与したものではない可能性がある。ただし、筆者はそのシンポジウムに参加していないために、具体的にどのような発表が行われたのかは把握していない。そのため、ここでは調査の対象は上万村のみではなく、周辺村落を含むものになるという可能性があるということだけを指摘しておきたい。
5. なお、本稿は2013年8月と2014年3月に行った短期調査で得られたデータに基づいている。第一回目の調査は慶應義塾大学言語文化研究所の青木健氏、福建師範大学閩台区域研究中心の徐斌氏、福建師範大学大学院修士課程2年の陳信健氏の協力を得て行われた。その際には上万村以外にも、福州市内にある明教の廟でも簡単な調査を行った。そして、第二回目の調査では、上万村で行われた儀礼に徐斌氏と筆者が参加し、観察やインタビューを行った。両方の調査において、インタビューの際には基本的に標準中国語を用いたが、現地の方言を解することができる徐斌氏と陳信健氏にはそのまま方言を使用してインタビューをしてもらい、それを適宜標準中国語へ訳してもらった。本稿は筆者が得た標準中国語のデータを元としているため、データの記述に何らかの誤りがあった場合は、全て筆者の責任に帰する。
6. オンライン版『霞浦県誌』第二十六篇「風俗・宗教」、第二章第三節「基督教」より <http://www.fjsq.gov.cn/showtext.asp?ToBook=3225&index=1778&>（2014年3月29日閲覧）
7. 注6と同じく、オンライン版『霞浦県誌』第二十六篇「風俗・宗教」、第二章第三節「基督教」より。
8. 上万村の族譜や祖先から継承された文物は、通常一年交代で特定の人物（「福頭」と呼ばれる）によって管理されている。基本的に、「福頭」以外の人物に族譜を公開していないようなので、調査の際には話者が属する支派のコピーをみせていただいた。今回閲覧できたのは、2002年頃に編纂された『濟南郡林氏宗譜』のうち、「上万世系譜」の一部分（印刷版）である。
9. 族譜に記されていた文言は以下のとおり。「澄公（筆者注：一行あける）世称林五公 行廿五 娶陳氏生女二 公於宋仁宗天聖五年丁卯棄俗入明教歷廿二年功行乃成 相傳公冥化後靈感衛民曾於昔朝福州救火有功敕封興福大王 蒙漢天師親書洞天福地四字金額奏封洞天都雷使加封真明内院立 正真君血食於廟祈禱響應 毎年二月十三子孫羅祭於墓祝慶於祠 公生宋咸平六年癸卯二月十三日吉時冥化於嘉祐四年己

亥三月初三日吉時 墓與二女同葬於所居東頭芹前坑」

10. 陳論文によると、万歴年間に編纂された『福寧府志』卷十五・僧梵に以下のような記述があるという。「林燈，上万人。嘉祐間，閩縣前津門火，郡人望空中有人衣素衣，手持鉄扇扑火，遂滅。遙告衆曰：“我長溪上万林燈也。”閩人訪至其墓拜，事聞書“興福真人”」。閩縣とは、現在の福州市と閩侯県の一部を含んだ範囲を指す。
11. ただし、陳（2010）によると、1990年代までは倒壊寸前の建物の一部が残っていたようなので、その前後に神像を宗祠内部へ移した可能性が高い。
12. 林らの報告では、「柏垵村」という表現と「柏洋村」という具合に「垵」と「洋」が混在している。本稿では記述の統一を図るために、公的書類に使用されている地名に従って「洋」という漢字を用いている。なお、林によれば、柏洋村の林氏は北宋年間に上万村から移住した一派であるといい、同じく2月12日から林燈の祭祀を行っているという（林・陳 2010:83）。柏洋村は、上万村から徒歩2時間ほど離れた場所にある。
13. 陳は『宋会要輯稿』「刑法二」宣和二年（1120）十一月四日“臣僚言”をもとに、明教徒たちが正月密日（密日は日曜日を指す）に集うことや「夜に集まり、朝になると解散する」ことを踏まえ、旧暦2月13日の林燈祭祀との関連性を指摘した（陳 2010:359）。林氏族譜には林燈が「嘉祐己亥年三月初三日密時冥化」とあるが、陳の計算によると林燈の亡くなった日は西暦1059年4月17日土曜日にあたり、翌18日は日曜日となるという。密時は17日と18日をちょうど跨ぐ子の刻（11時-1時）を指し、上万村で深夜に行われているという儀礼と明教徒の「夜集まり朝解散する」という活動規律とほとんど一致するとしている（陳 2010:359）。
14. 聞き取り調査によれば、上万村では毎年老林が経文を読む等、祭祀を執り行っているという。そのため、陳論文で登場した陳法師や謝法師は、上万村ではなく他の村で行われる祭祀を担っている可能性が高い。
15. 林らの報告内でも似たような道具の存在が描かれていたが、それは「王陽杯」と呼ばれる道具であるという（林・陳 2010:84）
16. ここで述べる漢族の宗教的特徴は渡邊（1991）を参照にした。

参考文献

青木健

2010 『マニ教』講談社選書メチエ。

2011 「『福建省霞浦県柏洋郷上万村マニ教徒シンポジウム』の報告」、篠田知和基（編）『神話・象徴・図象Ⅰ』、pp.85-91。

陳進国

2010 「明教的新発見—福建霞浦県摩尼教史跡弁析」『不止于芸』、pp.343-389。

笠沙雅章

1974 「方臘の乱と喫菜事魔」『東洋史研究』（32）4:21-43。

林子周、陳劍秋

2010 「福建霞浦明教之林燈の祭祀活動調査」『世界宗教文化』（5）:82-85。

村上重良

2006 『世界宗教事典』（第8刷）、講談社学術文庫。

常塚聡

2000 「中国社会におけるマニ教の認識—唐から明までの漢文史料を中心に—」『東京大学宗教学年報』（18）：89-113。

山本由美子

2011 『マニ教とゾロアスター教』（世界史リブレット・第9刷）、山川出版社。

渡邊欣雄

1991 『漢民族の宗教—社会人類学的研究』第一書房。